

# (八) 明正寺

明正寺は山号を證林山（しょうりんざん）と称する真宗大谷派の寺院である。茶山や山陽とも交流があった寺院の一つである。

一 明正寺の縁起 福山市神辺歴史民俗資料館ホームページ 神辺の寺院より

寺伝などによると、大門村（現福山市大門町）の瑞龍城（ずいりゅうじょう）の城主・藤間兵部光重（みつしげ）の子・藤間次郎明正（西備名区では六八郎光明Ⅱ出家後の教圓法師）が、弘治二（一五五六）年に戦死した父を弔うために僧侶となり、現在の福山市春日町浦上に一寺を建立したのが始まりとされています。その後、この寺は罹災に遭い焼失しますが、御領藁磨山城主・宍戸孫六の懇情（こんじょう）により現在の場所に移されたとされます。

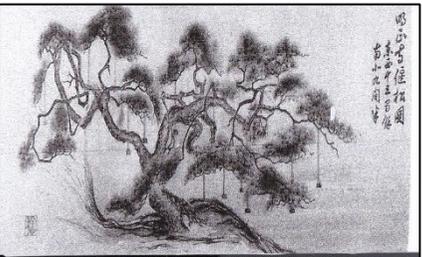
元禄十三（一七〇〇）年の検地の際には、すでに現在の場所にあったようです。さらに、この周辺からは、多数の古い五輪塔が出土しており、何らかの跡地へ建立されたことが考えられます。また、「旧広島県史」には「昔は天台宗であったが、天正元（一五七三）年、大門城主・藤間光重の三男である明正が浄土真宗に帰依（きえ）し、石山合戦に尽力した。」とあります。



江戸時代後期の十二世住職・祐教（ゆうきょう）上人は、当時「学を好み、詩歌を能くする」と有名で、菅茶山や頼山陽など文人との親交があり、境内で詩会などを開いています。茶山は祐教上人の求めに応じ、漢詩「偃松（えんしょう）詩」を贈っています。この偃松とは、当時境内にあった通称「かこいの松」と呼ばれた巨松のことで、その枝ぶりは東西二十七・三m・南北十七・三mにもおよびましたが、残念ながら慶応三（一八六七）年に枯死してしまいました。

「福山志料」には

證林山浄土真宗東本願寺末寺由来福山光明寺ノ條ニミユ寺中ニ蟠松一章アリ藤間刑部カ手植ナリト云此寺ノ開ケシハ刑部死後ナレハ生前ニ來リウヘシナルヘシ東西十三間南北八間アリ



明正寺偃松図 作者不明

境内には「かこいの松」と呼ばれる老木があったが、慶応年間枯死している。東西十五間（約二十七m）、南北九間半【約十七m】と書かれたこの「偃松図」からはその当時の雄姿が偲ばれる。現在の松は二代目。十二代住職の祐教上人の求めに応じて、詩を贈ったのが「祐教上人索偃松詩」である。この時、祐教上人は二十四歳であったという（菅茶山とゆかりの人々より）

祐教上人素偃松詩

黄葉夕陽村舎詩 後編 卷八

祐教上人 偃松（えんしょう）の詩を索（もと）む

四山擧目皆松樹 四山目を挙げれば 皆松樹（しようじゆ）

君家松樹何獨著 君が家の松樹 何んぞ独り著（あら）わる

榮蟠非是尋常種 榮蟠（えいばん） 是れ尋常の種に非ず

如虎如龍奇状具 虎の如く 龍の如く奇状（きじょう）具（そな）わる

如今緇流日蕃滋 如今（じよこん） 緇流（しりゅう） 日（ひび）に蕃滋（はんじ）

君輩何獨取聲譽 君が輩（やから） 何ぞ独り声譽（せいよ）を取る

平生心將靜者論 平生 心靜かなる者と論ぜんとす

自有美材令人慕 自ら美材の人をして 慕（した）わしむる有り

時尚爭學説法工 時尚（じしよう）争（あらし）い学ぶ 説法の工（こう）

榮願只在釵釧叢 榮願（えいがん） 只（ただ）釵釧（さいせん）に叢（あつ） まるに在り

苟能培養證眞果 苟（いやしく）も能（よ）く培養の眞果を證（しょう）せば

殊異何愧君家松 殊異（しゅい） 何ぞ愧（は）じん 君が家の松を

榮蟠 見事な曲がり具合の様。 緇流 墨染の衣を着る人、僧侶。 蕃滋 しげる、繁栄する。

聲譽 よい評判。 時尚 時をたつとぶ、流行を追う。 榮 譽や名譽。 釵釧 かんざし

や腕輪。

（大意）

四方の山々を見れば、みな松の樹がはえてる。君の家にも一本の松の樹がある。曲がりくねったその枝ぶりは普通の種ではない。虎とも龍ともみえる変わった姿をしている。今あなたは僧侶として日々繁栄をしているが、よく心静かな者たちと議論する中に、よい木はおのずから人を慕わせるものである。流行をあらそって説法を学んだり、名譽やいい評判だけを望むのは、高価なかんざしや腕輪に群がるようなものである。万が一にもその松の種を培養して育てても、君の家の松とは違うのだから、何を恥じることがあろうか

## 二 祐教上人（一七九七〜一八五二）

「明正寺十二世住職。幼名二徳 品行方正、學術に長じ詩歌、文書に通じ茶山、頼山陽と親交があった」（菅茶山とゆかりの人々）より）

### 参考文献

菅茶山とゆかりの人々

菅茶山記念館

神辺の寺院

福山市神辺歴史民俗資料館ホームページ

福山志料

芸備郷土誌刊行会

黄葉夕陽村舎詩 復刻版

児島書店